

また、同誌「我友の声」の欄に次のような感想文が掲載されており、意義深い展覧会であったことが推察される。

△本校の會議室で開かれた故狩野芳崖翁の展覧會は、翁の一生の面目を知ることを得ると同時に、故翁が如何にその藝術のために苦心慘憺せられたるかを見ることが出来た、彼の學校所藏の悲母觀音の一幅を見て、其技術と苦心とに驚くよりも、翁の一生の苦心はいかばかりであつたであらうか、翁は純狩野の人であつたのは今更らふ迄もなく、壯年の作は此間の真相を傳へて居るが、晩年に至りては一轉化をして、作風の變化と共に、思想の渾成融合の跡は、歴々たるものがある。藝術に遊ぶものは、かくの如き勉勵と苦心とがなくてはならぬものであるといふことは、故翁が生きた教訓を後生に遺したものであるかのやうに感じた（感激子）

なお、二十三回忌を紀念して翌四十四年二月、岡倉秋水、本多天城編『狩野芳崖遺墨帖』が西東書房より發行された。

⑤ 加納夏雄銅像除幕式

明治四十三年十二月四日、本校彫金科の最初の教授であつた故加納夏雄の銅像（原型米原雲海）が構内に建設された。構内銅像のさきがけであつた。除幕式の模様は『東京美術學校校友会月報』第九卷第三号に次のように記されている。

○故加納翁銅像除幕式 東京美術學校中庭に建設せられたる帝室技藝員彫金家故加納夏雄翁の銅像除幕式は、豫定の如く十二月四日午前十一時より舉行せられ、來會者は美術家知己其他二百餘名にして建設委員總代海野勝珉氏の報告に次で、正木〔直彦〕美術學校長は翁の斯界に對する功績及び當局を代表して銅像を受領する旨を述べたる後、翁の令孫幸雄氏除幕を行へば、東京美術學校の舊時の制服正帽を着けたる翁の半身像は、宛然生けるが如く、一同拍手の裡に芽出度幕を除き、次で濱尾〔新〕帝大總長、柴田幸三郎、鹽田眞、美術學校生徒、故翁の最舊門下生なる益田友男諸氏の祝辭等ありて、午後一時式を終り、夫れより園遊會に移り、各種模擬店を開き、手品大神樂の餘興ありしが、中にも柴田氏は故翁が靈刀の跡を留めたる、同氏所有の金釜に自家醸造の銘酒を沸かして來賓に振舞ひ、尙校内の一室には同校所藏及び都下所在の同翁作品數百點を陳列して觀賞に供したり。

⑥ 日英博覽會

明治四十三年五月一日より同年十月末日まで、ロンドンで日英博覽會が開催された。出品に関しては両国の通商關係を主とし、文教の沿革、美術、諸制度にも及ぶという方針がとられ、我が国から多數の古美術品や新作品（第一回〜第三回文展買上品等）が出品された。本校では正木直彦校長が同博覽會評議員、美術及び歴史に関する出品計画委員長を命ぜられ、また、大村西崖、岡田信一郎、久米桂一郎、岩村透、菅野真、関保之助らが出品準備に参画し、正木、久米、岩村、菅野、関らが渡英した。